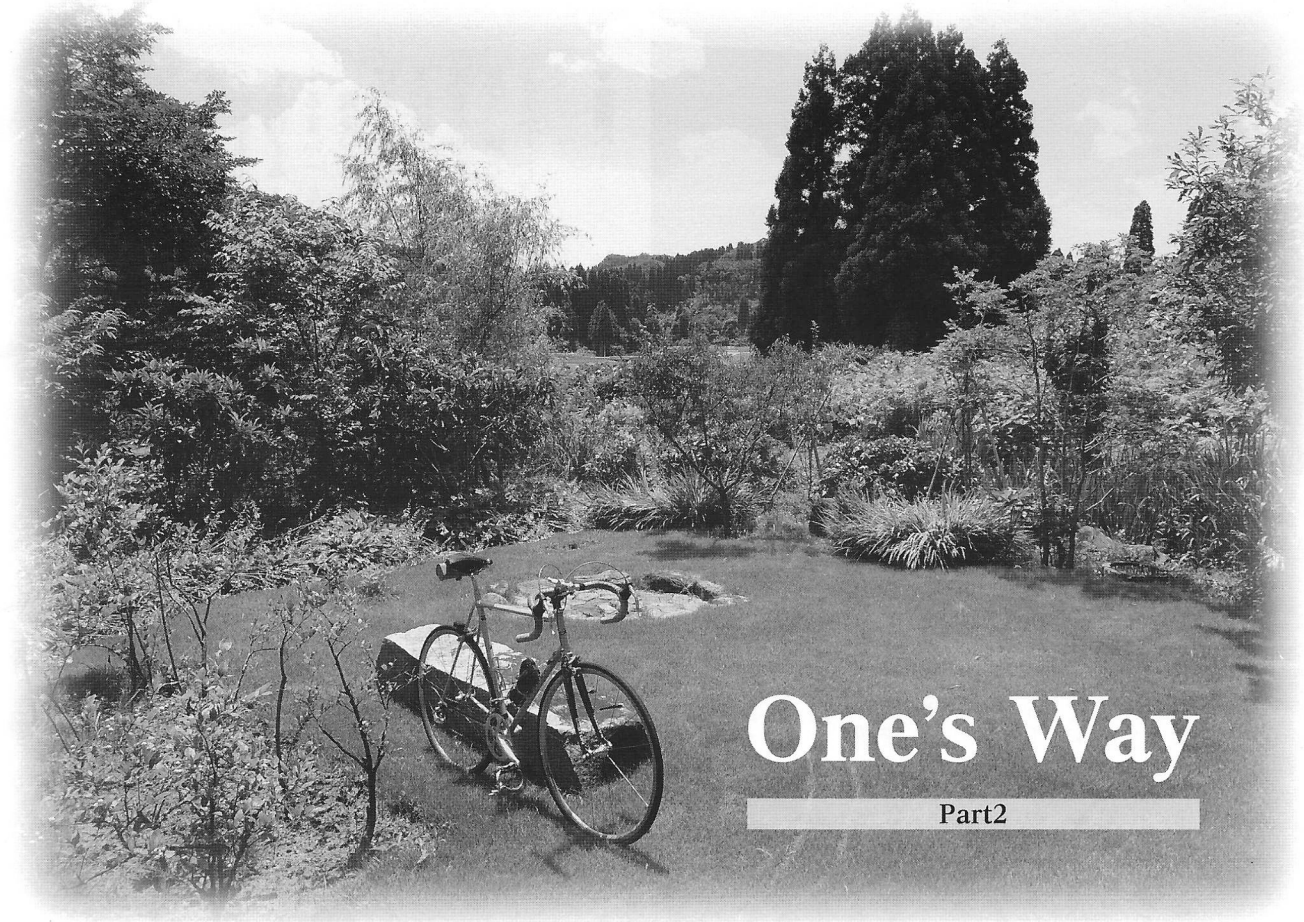




One's Way

Part2

松原 武晴

撮影■松原美砂／松原武晴

カット：育成中の雑木林につくった芝生広場。ここがいつの日か、ブルベ用の仮設キャンプ場になればいいな。不屈の精神をもつサイクリストにもひとときの休息が必要である

■「身長1メートル以上のガーデナーはいない」

サイクリングが動ならば、ガーデニングは静だ。どちらにもかたよらずバランスよく日々を送ることに、最近僕は心がけている。また、サイクリングもガーデニングも屋外での肉体作業なので、屋内の机上で行なうサラーイを得る職業ともバランスが取れていると思う。ある一つの分野が突出しようとすることを、他の分野が抑制する。そして自然と均衡が取れ、ほどほどで収まる。それが僕にとって健康的な毎日のように思える。日常のホメオスタシス（恒常性）とは、力関係のダイナミックなせめぎ合いの中での安定だ。動的静止といえよいいのだろうか。

若かりし頃のように、「食べているか寝ているか、さもなくば走っているか」という強迫的なサイクリング・ライフステージはすでに終了した。今の僕にとってガーデニングは、サイクリングを末永く健康的に持続させるためにも必要なのだ。

サイクリングとガーデニングには共通することがある。それは道具を使用した人力作業だ。

サイクリングには自転車と必要最小限の工具類。ガーデニングには鎌、剪定バサミ、スコップ、鍬などの庭の道具。草刈機とチェーンソーというエンジン機械だけは例外。でもこれ以上の機械を所有することはNGと自分にいい聞かせている。

電気やガソリンなど人力以外の機械を極力使わないことは、身の丈の自分が常に確認出来る。自我が無秩序に肥大化することを防いでくれる。機械を使うと万能感という錯覚に襲われる。しまいに手段と目的が逆転し、万能感に浸りたいが故に機械を使いかねない。チェコの作家カレル・チャペックはいつた。

「身長1メートル以上のガーデナーはいない」と……。

種から育てたクリの木の下、ひざまづいて草をむしっている、僕とクリの木の主従関係が逆転する。主人となったクリの木は僕よりもおそらく長生きするだろう。それでいい。大きな存在の前に、つましく背中を丸めて頭（こうべ）を垂れている方がいい。バイクだって同じじゃないか。そんな乗車姿勢の方が空気抵抗が少なくて済む。



グランfond富山2013、スタート前の風景。シューズの紐をしっかりと結び直す

そして何より美しい。
 ■グランfond富山2013
 庭仕事は夫婦一緒にするには好条件だ。バイクの場合、ペー
 スが異なると一緒に走ることが
 困難になるときがある。特に上
 り坂などではお互い気を使う。
 その点、ガーデニングはいい。
 一緒に同じ場所において楽しむこ
 とが出来る。

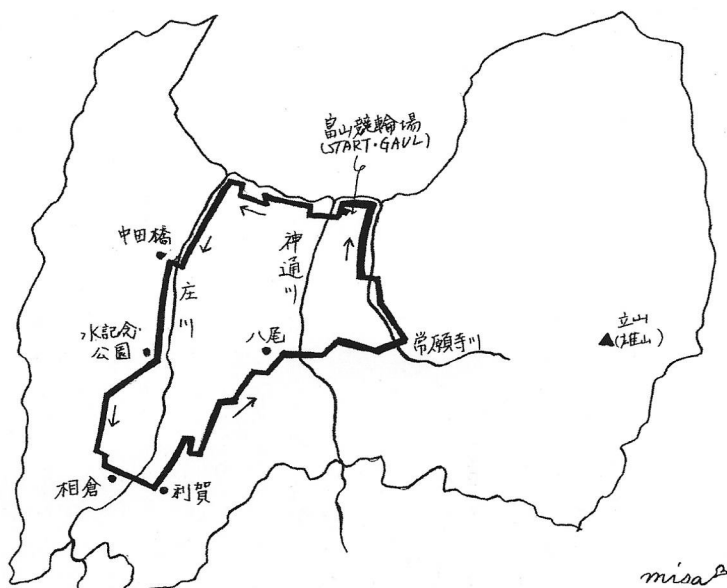
夫婦2人や数
 名のサイクリン
 グならばまだ許
 容されるが、バ
 イクの集団走行
 は、その集団が
 大きくなればな
 るほど、脅威に
 なる場合があ
 る。道がオーバ
 ーフローしてし



襟付きのマイヨを着てタイヤをタスキがけ。
 カスクに貼られたゼッケンシールがカッコ悪い

まうのだ。
 ゲリラ豪雨
 ならず、ゲ
 リラバイク
 集団にな
 る。歩行者
 や車のドラ
 イバーとも
 摩擦が生じ
 たりする。
 サイクリン
 グが好きな
 気持ちも人

情ならば、自転車集団にイライ
 ラするドライバーの気持ちも人
 情だ。
 「海抜ゼロメートルの富山湾
 から世界遺産・五箇山へ」のキ
 ャッチフレーズで始まった自転
 車長距離走イベント「グランフ
 ond富山」も、今年2013
 年には第4回大会を迎えた。2
 010年の第1回大会から僕は
 出場している。年々、参加人数
 も増え、今年はロングコース1



80キロに約700名も
 のサイクリストが挑ん
 だ。

2013年6月2日
 (日)、早朝。スタート地
 点である富山市岩瀬の富
 山競輪場に、スタートの
 1時間以上も前に到着し

たにもかかわらず、数多くのバ
 イクがスタート地点に寝かせて
 あった。スタート位置の場所取
 りである。700名以上のサイ
 クリリストが一気にスタートす
 ると、一般公道の交通が麻痺し
 てしまう。よって小集団に分け
 て、時間差を設け走るのだ。だ
 から、出発の号砲直後に走り始

めたいと思うと、どうしても前の方に並びたいというわけだ。グランフォンドはレースではない。しかしもうすでにレースではない。レースが始まっている。僕のロードバイクはスチールバイク（フォークのみイーストンのカーボン）で、トゥークリップにWレバーを装備。となると、スタイルもエイジングした方がよろしいかと思った。今大会、僕はサンテイーニの古風なウールマイヨ（自転車選手用の運動着）を着用して参加した。胸にはツール・ド・フラン



スタートの号砲が鳴る。しかし、僕のスタートはまだまだ先のこと

スの創始者、アンリ・デグランジュのイニシャルが入っている。頭には、デ・マルキのキャップとロジェーリのカスクを被った。

背中には、JCOのクリンチャー・チューブラー予備タイヤをタスキがけ。ツール・ド・フランスなどで選手が予備タイヤをタスキがけて走っていたのは1950年代まで。スイスの自転車選手だったフーゴー・コーブレット（1951年ツール・ド・フランス優勝）のタスキがけスタイルを、僕は一番かっこいいと思っている。

昔の自転車レースでは、他者から機材などのサポートを受けることは禁止されていたので、簡易空気入れも各自装備して走っていた。どんなに困難に出会っても自分の力で問題を解決し、完走することが求められた。たとえフレームが破損しようとも、鍛冶屋に飛び込み自力で修

理して走り出さねばならなかった時もあった。スポーツとして、否、冒険として自転車がとても輝いていた時代だと僕は思う。そしてアスリートである前にまず紳士であること。昔のマイヨは襟付きで、胸元は過度に開かず肌を公衆に露出しなかった。他人に胸毛を見せてはいけないというわけだ。現在はヘソの穴近くまでジップパーを開け出

て……といったところだが、僕はBOUZU頭なので止めておいた。意味がない。前衛的なカーボンバイクもカッコいいなと思うけど、グランフォンドはレースではない。1グラムでも軽く、1秒でも速くを求められるわけではない。10歳



まだまだ序盤の走り。僕（中央）の前を走るのは、竹製フレームのバイクに乗った菅笠、草鞋履きのサイクリスト

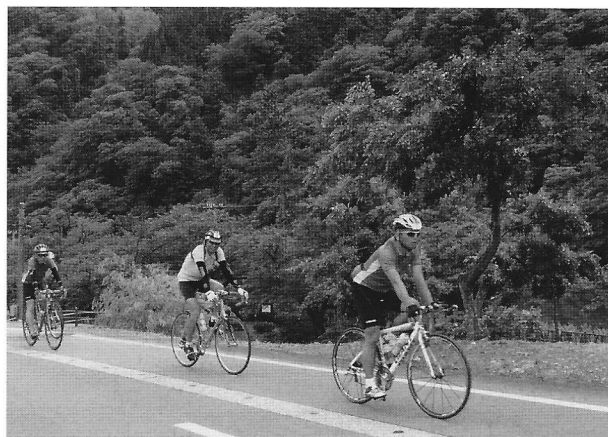
代から70歳代以上まで、コンテンポラリーなバイクの色というのは、文化として面白くないだろう。と思っていた矢先、さらに強者がいた。竹

フレームに菅笠、草履履きサイクリスト。思わず僕は、「失礼しやしたつ」と敬意を表し一歩下がることにした。

第1ステージ。僕のスタート位置は中盤あたりだった。スタート時、ライト点灯のチェックがあった。号砲を聞き、僕はハンドルに取り付けてあるマグライト・ミニのスイッチを入れ

庄川の橋を渡る。庄川は飛騨の雪解け水を集め、一年中枯れることはない





第1チェックポイントの庄川水記念公園が近い。いよいよ本格的な上りが始まりつつある

た。するとスタートラインに辿り着くずっと前に電池が切れた。仕方なく、列を抜け出してチェック係の方へ行き、「電池が切れたみたいなので、コンビニエンスストアへ行かせて下さい」と頼んだ。結果として、幸か不幸か、とても早くスタートすることが出来た。弁解するよすがだが、故意に電池を切らしたわけではありませんよ。

グランフォンド富山のロングコースには、ゴールも含めて全

部で5箇所のチェックポイントがある。第1ステージは、第1チェックポイントの庄川水記念公園まで、富山湾の海岸線を西に走り、富山県7大河川の一つ、庄川沿いを南上する。ほぼ平坦な道であるが、日本海側に位置する富山県は南へ向かうことが上っていくことになるのだ。ミシシッピ川を南下するトム・ソーヤとは反対だ。

皆、まだまだエネルギーが充分あるので、例年第1ステージ

は結構ハイペースとなる。こういう余裕のある時は、意識して定期的に補給食を口にしていた方がよい。もちろん走りながら。これが後で効いてくるのだ。

途中、路上に予備チューブライタイヤが転がっていた。しっかりと丸められた状態だったので、サドルか何かに取り付けてあったのが外れ、落としていったのだろう。僕の予備タイヤは絶対に落ちない。何せしっかりと



第1チェックポイント(庄川水記念公園)にて、ゼッケンナンバーをチェックされる

スキがけされているからね。これも古典的危機管理。

第1チェックポイントに到着した。スタッフにゼッケンナンバーを見せ、名簿チェックをしてもらった。

僕は思う。グランフォンド富山もフランス発祥ブルベ(後述)のように、サイクリスト各人が配布されたチェックカードを持っていて、チェックポイントでそのカードにスタンプを押

してもらいようにしたらどうかと。

完走した時は、そのカードが汗の染み込んだ貴重な完走認定証になる。こういうスタイルを僕はイタリヤ、トスカーナ

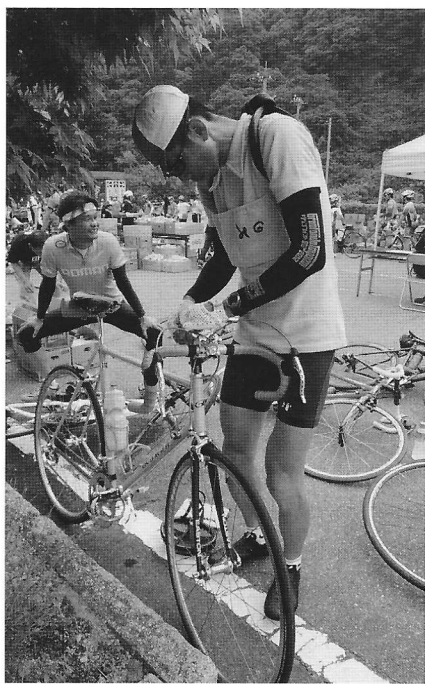
地方で行なわれているヴィンテージバイクの祭典「エロイカ」という自転車長距離走イベントの映像でも観た。

ゴール直後、スタッフの方がPCにゼ

ッケンナンバーを入力してプリントアウトされる完走証は何となく味気ない。もし各自チェックカードを持参していれば、ゼッケンはウエアに一枚貼り付けるだけで、何も嚴重にヘルメット前部にさえゼッケンシールを貼る必要がない。

僕はカスクを被っていたので、カスク前部にシールを張ると正直いつかつこ悪い。あのシールは大嫌いだ。ともあれシールは紙で、破れたり剥がれたりする可能性がある。チェックを終えて再スタートする際に、何故か(?) 僕のカスク前部に

途中のコンビニエンス・ストアで購入した新しい乾電池をマクライトミニ二に入れる。僕の後方でストレッチしているのは、友人の森田智之君。彼は大学時代から欠かさず「ニユーサイクリング」を購読している。庄川水記念公園にて





第2ステージへのスタート

貼られてあったはずのシールが剥がれていた（という）ことにした。

第2ステージ。第2ステージは世界遺産、合掌造りの建物で有名な五箇山相倉（あいのくら）集落までのコースだ。本格的な上りが始まる。今年で4回目のグランフォンド富山だが、僕には年々上りがきつく感じられるようになった。道の傾斜がきつくなっただけではない。変化

は僕自身にある。セ・ラ・ヴィ。それが人生だ。

妻による写真撮影は第1チェックポイントの庄川水記念公園までで終了していた。男は誰もが誇り高きナルシスト。正直いって、上りで苦しんでいる姿を愛妻に見せたくはない。奇しくもそこは平家落人伝説の地、五箇山への入り口だ。かつてはひっそりと身を隠して生きる土地柄

だったのだ。しかし隠れることは決して消極的な態度だというわけでもなからう。むしろその逆であり、現代風にいえばそれはレイド・バック。寛いだ気分が高みの見物といった不敵な態度でもある。

ギリシャの哲人エピクロスは言った。「隠れて生きよ」と。君子危うきに近寄らず。心の平安を乱す事象から距離を置いて、積極的に精神的豊かさを求めよとエピクロスは論じた。そ

の方がかえって現実が見えてくる。そんなエピクロスはこんな言葉も残している。

「自分の庭を耕せ」

1984年、秘境五箇山の玄関口である細尾峠に、全長3040メートルの五箇山トンネルが開通し、雪深い厳冬期も人間の往来が可能になった。そして1995年、五箇山合掌造集落が世界遺産に登録された。「世界遺産＝観光地＝経済効果」というのが国の方程式はどうして出来上がったのだろう。

話が逸れるが、僕たち夫婦は以前、スウェーデン、ストックホルム郊外にある世界遺産「スコーグスシユルコゴーデン」（森の墓地）を訪れたことがある。そこで現地の方に伺った話を紹介したい。

「森の墓地」が世界遺産に登録されて、ある世界的に有名なファストフード店が町に新店してきたそうである。町の住民は結果してそのファストフード店を追いついたという。静かな墓地、静かな町を守り継承していくことが世界遺産を守ることだということわけだ。これ幸いにお金儲けをしようという卑小な俗物

にはなりたくないという品格の表れでもあるだろう。

ちなみに「森の墓地」には、かつての大女優グレン・タルボの墓がある。彼女は34歳で女優を引退。その後84歳で亡くなるまで、徹底的にマスコミを避け、自宅でガートニングに勤しんだそうである。

ともあれ僕も含めグランフォンドの大集団は、静かな山間の相倉合掌集落に、大きな喧騒を運んできてしまったことは確かだ。本当にごめんなさい。

第3ステージ。第3ステージは五箇山の懐、利賀（とが）の山谷をいくつも越えて、「おわら風の盆」で有名な八尾（やつお）までのコースだ。飛騨山脈が充分に貯えた雪解け水は、水無月6月でも枯れることなく、いく筋にもなつて利賀谷を流れ出る。そして谷は日々その皺を深く深く刻んでいく。僕は深い溪谷の山道で喘いだ。隠れている熊にも聞こえるくらいに。だから熊よけの鈴は要らない。

とても辛い。脚の重みは大地に深く刻まれた果てしない歴史の重みであり、喘ぎ声は大地の鼓動に込められているようだった。

利賀は蕎麦の里でもある。世の中捨てる神あれば、拾う神あり。大規模水田には適さない山間の地であることが、かえって清楚なソバの花を育んできた。それは清流の傍らで潔い蕎麦切りを生んだ。僕は蕎麦が大好きだ。人生最後に何が食べたいか、つまり辞世の食事は何かと問われれば、僕は一献の酒と一盛の蕎麦切りと答える。食すことによつて心身が清められるような感じがする。さつと食べてさつと終える。是非に及ばず。あれもこれも食べるのは身体によくない。辞世だけどね。

そして今は自転車長距離走の途中。蕎麦を食べている余裕はない。長居は無用。僕は富山平野を目指して脚に鞭打った。

第4・第5ステージ。第4ス

テージは、富山県7大河川の一つ、神通川が生み出した扇状地の起伏を北東に向かう。神通川は風の通り道。その周辺は風が強い。幸いにもこの日は風が弱かった。富山平野では夏の暑い時期、北東から吹く爽やかな風を「あいの風（あえの風）」という。何と美しい響きの言葉だろう。富山には鬼門（中国大陸



ゴールの富山競輪場には妻が待っていてくれた。完走証を持って愛車とともに撮影

では匈奴の攻めてくる方角である北東を鬼門とした」が存在しないように思う。はたまた鬼の目にも情けの涙なのか。否、鬼は外にいるのではない。自分自身の内にいるのだらう。このステージ、大きな峠はないものの、小さな丘陵のアップダウンがある。そして僕の脚はかなり疲労していた。そんな時、内なる鬼が囁きかけてくるのだった。

「そんな辛いこと、止めとけばよかったのに。いくつになってもお前はグランフォンド（大馬鹿者）なんだよな」
最終第5ステージは、同じく

富山県7大河川の一つ、常願寺川沿いを北に向けて下り、早朝出発した富山湾岩瀬にある富山競輪場にゴールするコース。常願寺川はかつて暴れ川と呼ばれた。標高差3000メートルを川の延長わずか56キロメートルで富山湾に流れ込む、世界でも有数の急流河川だ。明治時代、オランダ技師ヨハニス・レーテがいった。

「これは川ではない。滝だ」
川岸にはとてつもない大きな岩が転がっていたりする。そんな常願寺川沿いの舗装路がコースなので、正に転がり滑るように走ることが出来る。ゴールに

向けての凱旋というわけだ。脚にまだ余力が残っていればの話だが……。

Big wheel keep on turning
Proud Mary keep on burnin'
Rollin rollin rollin on the river
by John Fogerty

大車輪が回り続け
誇り高きメアリーが元気に進む

川の上を流れ 転がっていく
(ジョン・フォガティ)

スタートした時の予定では、こんなロックン・ロールを頭の中で鳴り響かせながら、クルに凱旋という筋書きだった。だが、今年は違った。今年は疲労困憊していた。それもかなりくたびれていた。それで予定の曲を変更。

The night they drove old
Dixie down
And the bells were ringing
The night they drove old
Dixie down
And the people were singing
Like my father before me

I will work the land
by R.Robertson

デイキシーが打ちのめされた
夜
鐘が鳴った
デイキシーが打ちのめされた
夜
人々が歌った
かつての父のように
俺も大地を耕そう
(ロビー・ロバートソン)

僕は思った。どれだけ打ちのめされたとしても、大地を呪うことは出来ない。大地から離れることは出来ない。それがサイクリストだ。それが地球という大地から生まれ出でた生き物の宿命だ。また英気を養ってから戻ってくるぜ。だけど今日はこれでひとまず終了だ。

今大会のゴールは、富山競輪場のバンクを一周してから、一旦場外に出てゴールだった。ゴール地点に妻が待っていてくれた。こんな時、サングラスはとも役に立つ。ビートニクな表情を隠せるからだ。何事も、秘すれば花なり花なり。

■未来のステージ

グランフォンドは順位を競うレースではない。ブルベのように指定されたコースを一定時間内に完走する自転車イベントだ。ブルベ(Brevet)とはフランス語で「認定」を意味するそうである。定められた道を時間内に自転車で行き、それを主催者が正式に認定してくれるというもの。最短で200キロ。パリ・ブレスト・パリのように長いもので1200キロのブルベもあるそう。順位を競う訳ではないのだから参加者一人でもいい訳だ。時間内の完走を認定してくれる他者がいてくれれば。まあ、イベントとしてはあり得ないけれど。

ブルベはレースではないのだから、厳格にスタート時間を決める必要もない。ある程度幅を持たせて、何時から何時までにスタートして下さいでもいい訳だ。もし可能ならば何日から何日の間にスタートしてゴールして下さいでもいい。しかし、グランフォンド富山の場合、水や食料といった補給、コースの誘導、リタイヤした選手の回収等々、そして何か事故等が生じた時の責任問題等々、主催者側



ようこそ、わが家「One's Way」へ

としてのコン
ビニエ
ン・ストア
が道の途中
に数多くあ
る。また、

GPSが充
実しつづあ
る昨今、誘
導員は不要
になる。そ
してリタイ
ヤする場
合、本場フ
ランスのプ
ルベでは、
自力で帰宅
することに
なっている
そうだ。

事故保険

も自分で入っておく等々……そ
して何より事故が生じた場合な
どの責任問題について。責任を
自分自身で担って走るのが、本
当の自立したサイクリストだ。
最も重量のある責任という荷物
を担いで完走することに、最大
の意味があるのではないだろう
か。

他者と競う訳でもないのに多
くの人が同時に走るサイクル・

イベントが存在する所以は、共
通の趣味や趣向性を持った人々
が集い、同じ時間と感情を共有
することなのかもしれない。各
人バラバラではイベントにはな
らない。一人じゃ諦めてしま
うかもしれないけれど、皆が
くれたから頑張れた。それもあ
るかもしれない。でも一方で、

身の丈の自分が大集団の力を借
りて背伸びし、依存的に自我を
強化することにも僕は抵抗感を
感じる。あくまでも自分の本当
の力を見つめ続けるからこそ、
人間は謙虚な姿勢で居続けるこ
とが出来るのではないかと僕は
思う。

多くの人が一同に会しても問
題が少ない場合ならば、それで
もよい。でも趣向性の似通った
人間が大集団化し、他の趣向性
の人々と摩擦が生じたり、他の
趣向性の人々に脅威を与えるよ
うになるならば、熱慮してい
かねばならないと思う。少々過
激な表現をするならば、正義で
さえも集団化するとファシズム
化する恐れがある。

そして諸問題が生じた時、こ
れは如何なる諸問題においても
いえることだと思うが、

「ある問題が生じ、その問題
を解決しようとする時、既存の
マインドセット（ものの見方・
考え方）を変えないでその問題
を解決することは出来ない」
（アインシュタイン）

■One's Way 続々

わが家の屋号はOne's Way。
道に寄り添った東屋、休憩所。
否、それぞれの道と一体のも
の。点ではなく線だ。もし
One's Way がブルベのコース
になったならば、サイクリスト
の認定チェックを行なう場所に
なりたいたい。サイクリストの持参
したチェックカードにスタンプ
を押してあげるんだ。刻印は勿
論「One's Way」（それぞれの道
を）。そして近くのワイナリー
で作られたワインと、ささやか
な家庭料理でおもてなししよう
と思う。

勇気あるサイクリストには自
分の力で自分の道を走ることが
存分に楽しんでもらいたい。で
も何百人が同時に徒党を組んで
やって来られるのは、申し訳な
いが御免蒙りたい。あくまでも
野鳥が時々、木々の果実をつい
ばみにやって来るくらいの規模
でお願いしたい。

が多くを担い、イベントを集約
的に行なっている。
これらの観点は、レース志向
のものといえよう。あくまでレ
ースでないならば、考え方や
発想を根底から変えてもよいの
ではないか。自転車で走ること
が他者との競い合いではなく、
常に自分と向き合うことである
ならば、補給は自分で用意す
る。最近はいドステーション